2021 年度事業報告（中高）

１．基本方針

聖書に基づくキリスト教精神の原点にたち，常にこれを意識しながら教育活動にあたる。生徒の評価を点数や偏差値のみにするのでなく，その生徒の自己肯定感・自己効力感を高めることにつなげるものにする。毎日の生活が，家族・教師・友人を含め周りの者と安心感を持てるつながりができる環境とする。生徒が，平和を創ること，隣人につながることを生涯を通して希求する者となることを教育目標とする。

「学ぶ」……主体的に楽しく学ぶ。「認める」……他者を認め，自分を認める。「つながる」……他者や社会とつながる。以上の 3 つのキーワードを設け，それぞれ，「主体性の伸長」，「人間理解の深化」「グローバルマインドの育成」をカリキュラムポリシーとする。この新しい教育課程の構築をより具体的なものとし，その実践を成果につなげるように取り組む。

いよいよ少子化の影響などのため，中学入試の厳しさが顕著になってきているので，将来の中学高等学校像を検討し，迅速な対応ができる体制をつくる。

２．具体的アクション

第 2 次中期計画 （行動計画）	2021 年度事業計画	目標達成のための手段等	具体的な目標（数値目標）	執行状況 及び課題と対応
(1) 教育理念の実践と内部質保証の実質化 ア　キリスト教主義教育 a．礼拝を守る	・日々の礼拝を丁寧に守る。	・ホール礼拝，放送礼拝，オンライン礼拝で，生徒に，静粛・黙想・傾聴の姿勢を守らせる。 ・キリスト教行事の充実。	・キリスト教強調週間の持ち方を検討し，より良いものにする。	・コロナ禍の制限は続いているが、礼拝は守られている。ゲーンスホール利用の全校礼拝も、3 学年が集まってできるようになった。ただし、讃美歌なし。 ・秦野壽和様の寄附により高校チャペルにパイプオルガンを設置。図書館改装（PTA からも寄附をいただいている）、中学校舎外壁塗装も含め、より豊かな環境ができた。 ・高校クリスマス礼拝は、文化学園ホールで実施。3 学年のハレルヤコーラスは素晴らしいものとなった。中学讃美歌コンクールもゲーンスホールで、実施。クリスマス行事は、生徒の心温まるものとなった。
イ　新しい教育課程の構築 a.　課題研究カリキュラムの実践 b.　育成すべき資質・能力の設定 c.　一人一台 PC の活用 d.グローバル教育の実践	・「総合的な探求の時間」の充実 ・EP（Extensive Program）講座の拡充 ・教科横断的な取り組みの推進 ・PS（Peace　Studies）の学びの充実	・課題研究教育検討委員会の指針による実践をし，課題研究を通して育成できる力を構築する。 ・EP 講座を生徒が主催するのなど形を増やし，新しい挑戦をする。 ・高校修学旅行の分散派遣の可能性を探る。 ・外部機関との連携を拡げる。	・従来の所属する集団の中での評価のみでなく，生徒一人ひとりの学ぶ力（生きる力）を評価できないかを模索する。 ・PC の活用で育成できる力は，上記のことを可能にすると考える。一定の集団・時間・対象などの従来の枠を超えて，生徒を見ること，生徒の声を聴くことから始める。 ・PS での学びを生徒の主体性を持ったものにすることが今の改革のゴールである。一方，全体の到達度などとの両立が難しい。これに取り組む。	・課題研究の取り組みは、より充実したものになっている。社会・理科の教科研究を足掛かりに、中 3 では PS の内容から課題を選び卒業研究に取り組む。また、理科は夏休みに自由研究に取り組み、授業での発表につなげている。高 1 では、現代社会の授業の中で課題を自由に選び、社会現象についての課題研究をする。生徒の発信する力は確実に伸びている。3 月 15 日に、第 1 回探求フェス（課題研究発表会）を実施した。中 1 の発表に高校生が関心を示すなど、探求活動が生徒にとって大切なものとなっている。 ・EP 講座は、生徒主催の講座を含め 30 講座を超え、学年を超えた学びができている。 ・PC 一人 1 台体制 2 年目。高 3 以外は所持。高校生にとって、勉強・放課後活動など、なくて

				はならないものになっている。中学生にとっても利用価値は高いが、自宅での使用に関して問題も生じている。 ・ICT 利用により、碑めぐり案内をオンラインで実施、海外国内とのオンライン交流など、今までにないつながりが急速に広がっている。
ウ　生徒支援の充実 a.　集団に適応できない生徒の支援 b.　基本的生活習慣の確立	・教育相談体制の充実 ・一人一台 PC 活用充実のためにも、SNS 使用のモラルを高める。	・教育相談会議の指針による実践。	・学習ルームの在り方を検討する。 ・欠席多数による転出生徒の減少。 ・生徒保護者アンケートの「規則遵守」評価数値の上昇。	・高校１年生から、高校進学時の条件を緩和した。結果、難しい状況に陥る生徒がいる。生徒一人ひとりの状況は、著しく異なっており、学年会、生徒支援部を中心に時間をかけ真摯に取り組んでいる。教務規程などの検討も必要がある。 ・コロナ禍の中、一人にならないことを大切にしているが、中学生にとっては、部活動などに制限があり、家に一人でいることの精神的な負担は大きい。 ・学校行事が２学期まで行われず、保護者も学校に来る行事が無かったので、今年度は生徒保護者アンケートは実施しなかった。 ・生徒支援体制の強化には、カウンセラーやソーシャルワーカーなど教員以外のスタッフの充実が必要である。
エ　広報・入試対策 a.私学受験者数の確保 a.　入試問題の適正化を図る	・有効な広報活動に取り組む。	・オープンスクールの回数を増やす。ICT 機器を利用する。 ・基本方針に則った教育の意義を分かりやすく発信する。	・受験者の増加。 ・公立中高一貫校との区別化。 ・受験生の日頃の活動を評価するなど，独自の入試を模索する。	・2022 年度中学入試　志願者数 716 名（昨年 717 名）、入学者数 220 名（昨年 204 名）。 ・広報に関しては、多くの人数を集められないため、1 学期より、小 6 生を対象に、ミニ学校見学会を実施。大変好評を得ている。 ・10 月 2 日・16 日に入試説明会・オープンスクールを実施。2 日は保護者 274 名参加。 ・本入試では、コロナ対策のため、面接を実施しない。また、コロナ関連欠席者のための特別対策入試を実施。 ・2022 年度新入生から、入学金一部免除制度の運用を始める。
オ．進路実績を伸ばす a.　難関大学の実績を伸ばす b.　推薦入試等への対応	・PC 利用を含め、生徒の学習習慣の定着を図る。 ・課題研究や日頃の放課後の活動を通して得た力をアピー	・中学生の家庭での学習習慣確立が大きな問題となってきた。この対応を早急に取り組む。	・東大京大４名以上。国公立医歯薬 8 名以上。 ・保護者の進路に関する学校への要求が，多岐に渡っている。それへの共通した対応は，学力の確保しかな	・指定校推薦を希望する生徒が、昨年より多い。 ・国公立大学入試合格者は、76 名。（うち過年度生 21 名）（大阪 1、神戸 3、九州 3、広島 23） ・私立難関大学合格者が増加。（早稲田 15、慶応 4、上智 8、明治 16、立教 10、同志社 26、関西

	ルできるようにする。		い。一人ひとりを支援する体制をつくる。 ・キリスト教主義の大学との協定を図る。	学院 27） ・広島女学院大学 8 名（うち推薦 5 名）が進学。 ・広島県内私立大学進学者 29 名。（エリザベト音 1、修道 8、安田 4、国際 2、日赤広島 5、広島都市 1） ・現中 3 より、共通テストの教科に「情報」が入る。この対応のため、プログラム教材は、中学の家庭の時間を中 1・3 に技術として導入。高校「情報」の教科の補強を検討している。 ・推薦入試・総合型選抜による大学進学者が増加していく。出願書類作成の指導が担任一人では負いきれない。これに迅速に対応することが必要。